

じてんしゃ  
自転車がとめてある店のすみっこで、わたしはひと休みすることにした。

まったく、なんて長いアーケードなんだ。

おかげで、自慢の肉球もすっかりくたびれてしまった。

それにしても、ここは変な店だな。

じてんしゃ  
自転車がいっぱい並んでいるのに、値札も付いていなければ、それを売る店員もいない。

店内はしっかり電気がついているのに、騒ぎ声ひとつしなくて静かなもんだ。

まあ、そのほうがありがたいんだが。

にーと大きく伸びをしたわたしは、安心してウトウトしてしまった。

「さようなら！」

ふい  
不意に、子どもの元気な声をした。

しまった、ここには子どもがいたんだ。

人間の子どもは、時にわたしの天敵となる。

友達とケンカしたからとか、テストの点が悪かったからとか、自分勝手な理由で八つ当たり  
されたんじゃあ、かなわない。

わたしに八つ当たりしたって、何も解決はしないのに。

おっと、そんなことより、早く隠れなければ。

わたしが隠れるが早いか、勢いよく二階のドアが開き、一人の少年が駆け下りてきた。

さっきまでの静けさがウソみたいに、笑い声があふれてくる。

「分からんことがあったら、何でも聞きにくるんよ。」

「うん、先生、ありがとう。」

少年は笑顔で頭を下げると、隠れているわたしには目もくれず、風のように駆けていった。

まるで、何かを見つけたように。

わたしは今まで、人間とは何の目標も持たず、毎日<sup>てきとう</sup>を適当に過ごして大人になるやつら  
だと思っていた。

だが、全ての人間がそうではないらしい。

あの少年のように、前だけを見て、自分の足で走っていく子もまたいるのだろう。

人間も、捨てたもんじゃないな。

何かを打ち消すように首を振って、わたしはまた歩きだした。

今度は何を見つけようか。

あの子に負けていられないな。

風のように駆けていった少年の横顔が、なんとなく頭に残っていた。



ITTO 個別指導学院 尾道校 小畑美和/絵